

「IT・デジタル化」を考える

企業経営漫談士 岡野実空

今回のテーマは、いわゆる「情報革命」について。古代の「文字」、中世の「活版印刷」、そして近代における「電信」「電話」などの通信機器の発明と普及によって、人類は「情報伝達」で劇的な進化を遂げてきました。またそれによるソフトパワーの変遷は、京都産業大学・玉木俊明教授の『〈情報〉帝国の興亡』（講談社現代新書）で概要を学べます。しかし、ここで取り上げるのは、主に20世紀半ば以降の変化の加速とその影響。とりわけ近年の「デジタル化」を中心に、「時間」「空間」「人間(じんかん)」という「三間」軸から、「情報革命」がもたらした影響と課題を考えます。

軸1: 時間「短縮」

現代における「情報革命」の推進役は、NECの旧標語だった「C&C」の「コンピュータ」と「通信」。しかしその進化を加速し、世の中を劇的に変えたのは、なんといっても「デジタル技術」の進歩。またその加速度の目安は、第2次世界大戦直後に生まれた「半導体」の集積密度です。それは「18~24カ月で倍増する」という「ムーアの法則」として知られ、現代における「産業のコメ」として、世の中の劇的なスピードアップを牽引してきました。

畑違いながら、我が国で早くからその変化を予告していたのが、タカラヅカの奇才・高木史郎氏。1960年初演、歌劇団の代表作の一つ「華麗なる千拍子」の作者です。音楽の拍子が、一からいずれ十百を越え、千の桁に飛躍するほど、世の中の変化が加速するという題名は、当時のマスコミですら理解不能。一部の新聞が、わざわざ「千拍手」と校正？して作品紹介したという笑い話も残っています。

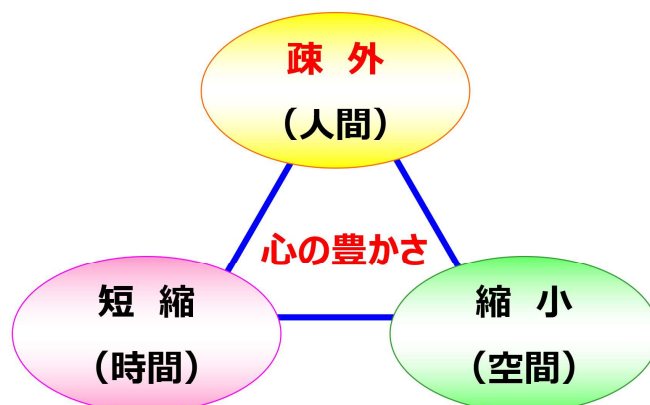
軸2: 空間「縮小」

近代、ヒトの高速移動を可能にしたのは鉄道や自動車、そして飛行機ですが、モノの場合は、船も加えた高速ロジスティクスのおかげ。しかし「情報」の分野に関しては、圧倒的に「電信」や「電話」という「通信」の発達によるものです。それらは「距離」という概念をどんどん希薄にし、「It's a small world」に貢献しました。「デジタル化」はそれをさらに大きく加速しただけでなく、「インターネット」によって、「コスト」を考えなくてよいという夢の扉も開きました。このように「情報革命」は、情報だけでなく、ヒト・モノ・カネの高速移動を強力に支援し、地球をさらに小さくしたのです。

軸3: 人間「疎外」

いま「情報革命」の主役は、「スマートフォン」。それは私たちの「情報」入手や交換の利便性を飛躍的に高める一方、不便ゆえに磨かれるコミュニケーション能力の低下を招いています。そ

KM 1-4 「デジタル化」のインパクト



の典型は「付度」。他人の心中を押し量る力が落ちたとばかりを受け、すっかり悪者になってしまいました。

また仕事を創出するなどして、これまではうまく対処してきた人類も、「デジタル革命」による急加速には対応できず、失業増加や格差拡大など、人間疎外を惹き起こす諸問題に立往生しています。

「華麗なる千拍子」初演からすでに半世紀余。ITの進歩によって、当時の映像をインターネットで個人が気軽にタダで視聴できる時代。やたらノンビリした当時の「千拍子」は、今後再演するなら題名は「万拍子」か？そこに人工知能も加われば、近い将来「億拍子」にもなるかもしれません。

そんないま、定型化した仕事は極力機械に任せ、社会が真剣に取り組まなければならないのは、新たな時代を切り拓く「人材育成」。それは「心」を豊かにし、多くの人を幸せにする「コト」を考え、実現できる「人材」です。「デジタル化」がもたらす進歩は、「思考力」と「対話力」という人間の本質的な能力を必要としています。いまこそ、それを100年以上考え、そのための人材を輩出し続けた組織に学ぶとき。皆さん、いざ、タカラヅカへ！

平成30年4月9日 実空